アメリカ文化論(Ⅱ)

金勝　久

目　次

§ 10.　危機時代における再建政策
§ 11.　再建時代の終幕への Informal Structures
§ 12.　矛盾と対立の激化
§ 13.　Yankeeism の理念
§ 14.　Anti-Yankeeism の百家争鳴

§ 10.　危機時代における再建政策

南北戦争という前古未曽有の南北衝突の真の目的は,「States を分離させてはならない」という Abraham Lincoln の執念により，奴隷解放という現実問題にすりかえられてしまったが，ともかく，その現実問題は修正憲法第13条～第15条の改憲によって目的が達成されたのは前述の通りである。

しかし，その裏付けとなる解放黒人への経済的援助と，それに関連する政治的措置という実際問題が打ち出されなかった。

大体，A. Lincoln が戦争目的に「連邦の維持」のほかに,「奴隷解放」という人道的目的を敢えて付加したのは,

(1)　連邦軍の兵士を奮いたたせること。

(2)　この内戦にイギリスやフランスからの介入の口実を封ずること。

(3)　議会において，急速に勢力を拡大しつつあった奴隷解放を主張する議員達の支持と協力をとりつけること。

という三つのねらいからであった。しかも奴隷の「全面的解放」でなく，解放の対象を「分離諸州の奴隷に限る」としたのは，奴隷州でありながら，連邦に

くみしている境界州の動揺を防止しようという意図があったのは事実であるが，結果は非常に難かしい状態になった。すなわち，A. Lincoln は当初，The Federal Army (=北軍) の目的を The Army of the Confederate States of America (=南軍) の戦意の破壊に限定し，領土的占領は全然考えなかったのであるが，現実的には，軍政は前線司令官の行政的判断に一任する以外に方法はなかった。おまけに，彼ら前線司令官達にも統一的見解がなかったので，将来の展望もなければ行政的決断もまちまちであった。例えば，占領地区の奴隷問題にしても，「私有財産の尊厳」という立場から，「奴隷 (=「財産」) には手をつけてはならないのか？」それとも「全面解放なのか？」という点に関してさえ，見解も判断もまちまちであって，その場その場で処理されたのもその一例である。

従って，現実の再建政策は，現地司令官の手さぐり的占領行政の中から形成され，議会は，その措置を追認するか，否かの議論で終始する有様であった。その結果，1866年から67年の初頭にかけて黒人奴隷は，いわゆる Sharecropper[1] として投げ出され，経済的にも，社会的にも何一つの恩典もなかったし，他方，A. Lincoln の再建政策も多大な困難に遭遇した訳である[2]。殊に1864年に彼が観劇中に南部人の俳優に暗殺された為に，事態は一層悪化した。それは，この暗殺に憤激した共和党急進派による「きびしい再建政策の立法化」[3] が強引に押し進められたからである。そしてこの強引な方策には，遙かに多くの問題点が内蔵されていたが，ともあれ，時勢の進展により南部諸州も，1868年には憲法修正第14条の批准を条件に，つぎつぎと連邦に復帰し，この方策に最後まで抵抗した Georgia, Mississippi, Virginia, Texas の諸州も1870年までには再建案を受け入れて危機の再建時代は一応おさまりを見せたので，形式的には連邦統一の大業は完成されたが，その前途は極めて多難なものであったことは，いわゆる「1877年の妥協」[4] が，何よりも雄弁にこの間の事情を物語っている。

§ 11. 再建時代の終幕への Informal Structures

ともかく，再建南部で独裁的支配権を握っていたのは南部共和党であって，そのあまりにも短兵急にして，懲罰的意図をこめた急進政策は，大局的にみると，政策自体に欠陥があったというべきであろう。

なぜならば，当時，再建政策への南部側の対応は，大きくわけると，

(1) 古き，良き時代としての戦前の南部社会を回想し，再建政策にはあくまで反抗しようとする農本主義者の理念と，その行動。

(2) 今後の南部の進む道は，綿花中心の mono-culture 的経済から脱皮して，北部資本の利用を夢想する革新主義者の理想と，その追及。

の二つに分類することができる。

結局，戦敗という歴史的必然から後者が優位を占め，その信奉者達は従来の Plantation 社会を一応近代的制度に改変し，アメリカ産業資本の体制下に，政治的にも，経済的にも北部と共存できる体質に変身できるように，努力した。

しかし，これを指導した南部共和党の理念は，長期的展望を欠いていたと言っても過言ではない。なぜならば，彼等の意図は，軍事的威嚇による近視的目的の達成と黒人票への期待に過ぎなかったからである。その結果，政策はいたずらに混乱とかたよりを見せ，非常に大きな矛盾と対立をもたらした為に，ただ南部人の潜在的反感を挑発し，コンプレックスを助長する結果になった[5]。

そして，この傾向は，更に carpet-baggers[6] や scalawags[7] と呼ばれた便乗者達によって拍車をかけられたために，多くの利権が悪用され，混乱と悪弊は目に余る有様であった。

次に黒人票について言うと，最初は解放された奴隷達は A. Lincoln の政党，すなわち，共和党を大恩恵を施してくれた救世者として全面的に支持したのは事実であるが，A. Lincoln 大統領が暗殺されたという極めてショッキングな事実が最大の原因であるが，もう一つは時間の経過と共に，戦後の興奮が落ちつくにつれ，自然にその謝意も低下し，逆に経済的な裏づけを欠いた政策に対し，幻滅とあきらめを深めるようになったために，再建後の帰趨は予断を許さ

ない状態となった。

要するに，南部の再建政策は，黒人問題をはじめとして，南部人だけでなく，当時の北部人の政治意識の水準では到底解決できない問題であったというべきであろう。

しかし，南部共和党の功績も見逃してはならない。例えば，彼らは膨大な必要経費を，州債発行や，増税でまかなったとはいえ，南部の民主化や工業の振興，或いは，社会福祉の向上に大きく寄与した点は高く評価しなければならない[8]。

更に，南部においては，1867年頃から，各州で，つぎつぎと再建政府を倒して，州政治の実権を握りはじめた Bourbon と呼ばれる新しい南部の指導者たちは，かっての古いタイプの農本主義者や Planters ではなく，南部の新しいブルジョアジーであり，その利益を代弁する政治家たちであった。それゆえに，彼らは，党派的には民主党に所属しているが，一様に北部との協調を重視したがために，政治理念においても，経済政策においても，共和党の支配を脅かす存在ではなかった。

そのために彼らは，1877年の大統領選挙をめぐるトラブルを共和党に有利に収拾し得たのを契機に，南部の再建政府を物理的に支えてきた連邦軍を南部諸州から一斉に撤退させることにも大きな功績を見せたのである。

§ 12. 矛盾と対立の激化

前節でちょっと触れた矛盾と対立は意外に大きな影響をアメリカ的信条に与えている。

まず，南部の再建を占領による威嚇と，黒人票の操作にたよった Republican Party は，Homestead Act の制定によりアメリカ独自の発展を見せた工業と農業の相互補充的発展（駐9参照）に対し，単なる伝統的保護関税政策だけでは今後の政局をのり切れないことを自覚した[9]。

このことは最初の大陸横断鉄道の完成[10]，Cumberland Road の開発[11]，移民法[12]による低賃金，労働者の保護などの経済面での拡大発展と，綿繰機[13]，

タイプライター，電話[14]，電球[15]などの発明による技術革新が進めば進むほど，大衆の共和党の政策に対する不信が増大したことは皮肉であった。

しかし，その原因は，共和党の政策が，ややもすれば，註9に説明した事情から，東部ならびに西部の動向に傾き勝ちであったことと，政策自体が本質的に曖昧であったことに起因すると言っても決して過言ではない。

それが証拠に，1877年の大統領選挙（駐4参照）は，特に Ulysses S. Grant（第18代大統領1869年～79年）時代の汚職事件のために Democrats と Republicans との間に火をふくような大接戦が展開されたが，多くの疑義を残したまま Republicans の Rutherford Hayes（1877～1881）が当選したのは，その場，その場の比較的短見な政策とやりとりが偶然成功し，単に自党の有利さのために役立ったと見ても決して間違いではない。

続いて，第20代大統領の J. A. Garfield（1881年）も，また第21代の Chester A. Arthur（1881～1885）にしても，いづれも共和党出身の大統領であったが，この期間は，共和党の自粛と反省とが最も強く要請された時代であった。なぜならば，この時期はアメリカ産業革命の完成期であり，産業の合同と集中が盛んに行われた時代であったのは史実が何よりも雄弁に物語っているところである。従って，本来ならば，より強固にして長期的な信念と理念に基いたより純粋な政策が求められた筈なのに，なぜ古色蒼然たる場あたり的共和党政策が，かくも長く続き得たのであろうか？

原因はいろいろと考えることも出来ようが，要は余りにも急激な社会的変化に対し，与党も野党もついて行けずにうやむやに過ごさざるを得なかったことと，一般大衆の批判も一つにまとまった改革運動に発展するには未だ時間的に早かったといわざるを得ない。これは要するに当時のアメリカ人一般の文化的認識と教養的レベルの問題であろう。

例えば，大陸の開発は次のように目ざましいものであったにもかかわらず，政党は勿論，民衆もその実態を正しく認識出来なかったのである。すなわち，1860年からの40年間に，合衆国は工業投資額を12倍に，年工業生産額を6倍に増し，世界第一の工業国となったし，鉄鋼[16]，電気，通信，事務機器，農業機

械，その他あらゆる分野での技術革新は眼を見張らしめるものがあった。次に最初の大陸横断鉄道の完成は，交通の要地に都市の成長を促し，1860年に16に過ぎなかった人口5万以上の都市は1910年には109を数えるに至らしめた。そして鉄道網の発達と共に，西部への入植は急激に進み，Nevada 州や Dakota 州の金銀ラッシュに続いて，大平原に国有地の無料の草地を利用する「牛の王国」が出現し，ついで農民が進出した[17]。この間，インデアンの抵抗も終わり，彼らは不毛の保留地に追いこまれてしまった。

いわば大陸の征服はほぼ完了したのであって，その内部は運輸，通信網によって結合され，この全国的市場は，歴代の共和党政権の保護関税政策で守られた為に，農業政策は第二義的となり勝ちであり，地方の局地的市場に立脚した小企業は，大企業に駆逐されてしまった。

例えば，カーネギー製鋼や，スタンダード石油，あるいは国際収穫機などは，トラストやコンツェルンに発展し，各分野に大企業の独占が見られた事実が何よりもはっきりと，この間の消息を物語っている。

当然の結果として，次のような重大問題があらゆる階層の国民に大きな衝撃を与えることとなった。

(1) 労働運動は A.F.L への結成[18]

(2) 農民運動の Green-back Party や Farmer's Alliance の形成，更に，Populist Party の誕生[19]

(3) 移民制限問題[20]の The United States of America の理念への影響。

以上のような社会的，政治的大変転に対し，第16代 Abraham Lincoln 以下，第21代の Chester A. Arthur (1881～85) まで続いた共和党の関税政策だけでは，とても与論の支持を得られなかったのは当然である。

§ 13. Yankeeism の理念

人間は環境の動物であるとは名言である。先住民としては American Indians しかいなかった17世紀の初頭においては，新大陸は殆んど無人の曠野であった。そこへ乗り込んできた Anglo-Saxon 系の植民者達は，宗派，地域の別を

問わず，厳しい大自然との対決を経験しなければならなかった。然し彼等が期せずして念願した希望と理念は，「自由，平等，幸福」の追及であって，そこには未来への夢があった。彼らはその夢を新大陸開発と共に徐々に実現し，政治的にも経済的にも英本国の干渉を払いのけ，遂には The United States of America を独立させ，民主主義という大義名分の下に「自由，平等，幸福」追及への信条を打ちたてたのは前述の通りである[21]。

然し，環境の相違から，北と南では，その追及の過程に時間的なずれが生じ，遂には「自治権をめぐっての州法と連邦法との絡み合い」という難問に遭遇し，その解決の為に，南北戦争を惹きおこしたことも前述の通りである[22]。

そしてあの大悲劇も決して完全な解決を生み得なかったことも §10～§12 に述べた通りである。

それでは §9 の終りに提出しておいた大疑問一すなわち，Thomas Carlyle が「American Democracy に対する告発」[23] と断言したように，いわゆる Democracy は単に砂上の楼閣に過ぎなかったのか？　それとも，ある意味では絶大な期待を寄せながらも，速断を避けた John Stuart Mill の見解[24] が正しかったのか？　これに対する結論は今後の実績をまたねばならないが，1865年から1890年までの1/4世紀間に The United States of America の政府が見せた実績は余り芳しいものではなかったと言わざるを得ない。

それが証拠に第16代大統領 Abraham Lincoln 以下第21代大統領 Chester A. Arthur まで続いた共和党政権はただ関税政策をもてあそぶことで終始したため，とても与論の支持を期待することができなかった事実を見れば十分であろう[25]。そして続いて起った二大政党交代による大統領達も同じように与論に対処できず Thomas Carlyle の予断がやや的中するような世相を現出したのは否めない。

だが私達は尚も Johe Stuart Mill の控え目の期待に望みをたくしたい。そのためには，どういう理念を模索すべきか？　これは非常に難しい問題であるが，結局はこの1/4世紀の間に「アメリカ人的信条」がもう一度変革したという事実をはっきりと認識しなければならない。

簡単に言うならば，これ迄述べたように，危機の再建時代からアメリカ資本主義の完成に至る期間に，いわゆる Yankeeism の一大短所である金権主義により，「アメリカ人的信条」は大きく変革されたのである。このために，The United States of America と言えば，金権主義をまず第一に連想するという程にまで Yankeeism が顕著になったのである。この間の実情は Margaret Mitchel[26] の *Gone with the Wind* や Mark Twain の種々な作品に見事に画き出されているので，いちいち例証をあげる手数は省くが，要するに四半世紀の環境の変化が金権に対する人間共通の弱みにつけこんだ結果と言わなければならないし，アメリカ人の image を大きく低下させたとも言なければならない。

それにしても，この理念は，どのような理論でカヴァすべきか？ これに対し，いろいろの見解もあろうが，Bertrand Russell が「中国国民性は『中庸』と『寛容』にあるのに対し，西欧人の特性を『進歩』と『能率』にある」と論断した見解が一番よくあてはまるように思われる。

> The Chinese have discovered, and have practiced for many centuries, a way of life which, if it could be adopted by all the world, would make all the world happy. We Europeans have not. Our way of life demands strife, exploitation, restless change, discontent, and destruction. Efficiency directed to destruction can only end in annihilation, and it is to this consummation that our civilization is tending, if it cannot learn some of that wisdom for which it despises the East.
>
> .....
>
> .....
>
> We in the West make a fetish of "progress," which is the ethical camouflage of the desire to be the cause of changes. If we are asked, for instance, whether machinery has really improved the world, the question strikes us as foolish: it has brought great changes and therefore great "progress." What we believe to be a love of progress is really, in nine cases out of ten, a love of power, an enjoyment of the feeling that by our fiat we can make things different. For the sake of this pleasure, a young American will work so hard that, by the time he has acquired his millions, he has become a victim of dyspepsia, compelled to live on toast and water, and to be a mere spectator of the feasts

that he offers to his guests. But he consoles himself with the thought that he can control politics, and provoke or prevent wars as may suit his investments. It is this temperament that makes Western nations "progressive."

.....

.....

These general ethical considerations are by no means irrelevant in considering the practical problems of China. Our industrial and commercial civilization has been both the effect and the cause of certain more or less unconscious beliefs as to what is worth while; in China one becomes conscious of these beliefs through the spectacle of a society which challenges them by being built, just as unconsciously, upon a different standard of values. Progress and efficiency, for example, make no appeal to the Chinese, except to those who have come under Western influence. By valuing progress and efficiency, we have secured power and wealth; by ignoring them, the Chinese, until we brought disturbance, secured on the whole a peaceable existence and a life full of enjoyment.(28)

(中国は，もしそれが世界全体に採用されるなら，全世界を幸福にしやれるであろうような生き方を発見したし，それを何世紀にもわたって実行してきている。われわれヨーロッパ人は，そのようなものを持っておらない。われわれの人生の行き方は，斗争，搾取，落ちつきのない変化，不満，それに破壊を要求している。破壊に向けられた能率主義は，ただ人類の全滅を意味している。そこで，われわれの文化が軽蔑しているところの東洋の知恵をある程度学ぶことができないなら，われわれの文明が目指しているものは正に，この徹底的な人類破滅はほかならない。

.....

.....

西欧においては，『進歩』というものを求めて止まないのである。『進歩』とは変化の原因となりたいという欲望の倫理的カモフラージュある。もし，果して機械が世界を改善したであろうかと問われるとするならば，その質問は愚かなものとわれわれに思われる。すなわち，機械は大変化をもたらしたから，大進歩をもたらしたのである。われわれが進歩を愛するものと信じているものは，実際は，十中八，九迄，権力愛であり，われわれの認可によって事態を変え得るという感情に対する喜びである。この喜びのために，若いアメリカ人は，一生懸命に働くのであるが，彼が何百万ドルかを獲得する時には，消化不良に陥ってしまって，トーストと水とで生活せざるを得なくなり，彼が客人に出す御馳走をただ傍観せざるを得なくなるのである。しかし，彼は政治を支配できるし，彼の投資に適するように，戦争を起したり，防止させたり

し得るという考えで，彼自らを慰めている。西欧人の考えを『進歩』ということに向けられるのは，ほかならず，このような気質なのである。

……

……

このような倫理的考察は，中国の実際的諸問題を考える際に決して無関係なことではない。われわれの産業的商業的文化は，何が価値あるものであるかということについての無意識な信念——程度の差こそあれ——の結果であるとともに原因でもあった。中国においては，この信念に挑戦する社会の考え方を通して，それらの信念が，同じように無意識的に，異った判断の上に打ちたてられているのをわれわれは意識するようになってきた。例えば，進歩と能率は，西欧的影響を受けた人々を除いては，中国人には何らの魅力ともなっていない。進歩と能率とを価値あるものと見做すことにより，われわれは力と富とを確保した。それらを無視することにより，中国人は，われわれが中国を攪乱する迄は，全体的に，平和な人生と喜びに溢れた生活を確保したのである)[29]

§ 14. Anti-Yankeeism の百家争鳴

要するに19世紀後半の社会的大変革と技術的大革新にもかかわらず，殆んど無能とも言いたい共和党政権が何代にもわたって続いたのは「Yankeeism の浸透による一般大衆の文化的認識の低さと教養の狭さ」という問題が大きな原因であるが，もう一つ「Social Darwinism 的古い価値観が尚も変らずに続いていたこと」と「Mark Twain の *The Gilded Age* に見られる成功物語の幻想が大衆の心の中に残存していた」という保守的思想が更に，しかも逆に，二重にも三重にも，この新傾向に絡み合ったという複雑な事情を忘れてはならない。

すなわち前者は「自由放任(レッセ・フエール)は社会全体を幸福にし，貧困は個人の怠堕と堕落の結果であり，社会の現状は適者生存の結果であるから，これを改めようとする試みは進化の法則に反し，却って有害である」という考え方であり，後者は「機会と努力」を信ずる明るい未来観であった。すなわちもっと判りやすく言うなら，前者は更に世俗性を帯びた時には Yankeeism を助長したし，後者は「Log Cabin から White House へ」とか「Poor Richard が Millionnaire へ」

という明るさが，ちょっとした事で逆な人生観に転ずる可能性を秘めていたのである。

これを社会的見地からみると，アメリカの社会の安定性は，社会の底辺と頂点という区別が存在しないことにあったのではなく，底辺と頂点が流動的に結びついたということであった[30]。

ところが，ここへ Yankeeism の思想が浸透してきて，19世紀末になると，百万長者は自分自身を民衆の一人としてではなく，本来異った存在，すなわち，社会的 Darwinism の用語によれば，fittest として示すようになった。具体的に言えば，T. B. Veblen[31] が *The theory of leisure classes* で指摘したような貧富の差の拡大がアメリカ国民の一体感を大きくゆさぶったのである[32]。

政府の自由放任政策はある意味では，このような風潮を大きくバック・アップしたといってもよい。事実1867年ロシヤから譲り受けた Alaska は，第二の Gold Rush を展開したのを機会に，中部の農業地帯は，もはや Frontier ではなく，単に Agrarianism の残墨となった。そして Pioneers はもはやピストルや斧を武器とせず，巨大な機械力を用いるようになった。この結果，少数の個人的成功者の陰に泣く悲運の大衆を生みだすと同時に，勤勉なクリスチャンを貧窮に突きおとしてしまった。

この現状に対し，さきに触れた Thorstein Bunde Veblen に引き続き，各方面からの改革家が雨後の荀のように出現した。すなわち保守的な社会進化論に対し，L. F. Ward[33] は「人間は動物と異る。すなわち，知性によって文明を形成してきた人間は政府による集団的知性の活用によって社会を進歩させ得る」と論じ，社会の理知的活動を重視した[34]。

経済学においては，R. Ely[35] らが現実の経済の動きを解明し，経済学を社会問題解決の道具にするよう提唱した。

政治学でも，抽象的議論を排して，現実の政治の動きを観察し，その欠陥を指摘する風潮が生じ，法学でも O. W. Holms[36] が，法を社会の現実に対応して変化するものとして論じた。

更に Henry George[37] は *Poverty and Progress* (1879) の中で,「生産力の著るしい増大こそ,今世紀を特徴づけるものであり,生産力はまた現実に加速度的に増大しつつあるが,その生産力も,実際的には貧困を絶滅し,困苦勤労するものの負担を軽減する傾向を見せていないことも明らかである。……進歩と貧困との結合こそ現代の最大の謎である」と,民衆の社会的,経済的苦悩の根本を衝き,「諸悪の根源を土地所有の独占にあるとし,その矯正案として,勤労及び,その所産に対する課税をやめ,土地のみに課税すべきである」という Single Tax 論を提案した。彼のこの主張は進歩にもかかわらず貧苦が存在する矛盾になやむ多くの人々の共鳴を得るに至った。

Progress and Poverty より約10年おくれて Edward Bellamy[38] の社会主義的 Utopia 小説 *Looking Backward* (1888) も出版後10年以内に100万部売れたといわれるほど19世紀のアメリカの人心に訴えた。この小説は紀元2000年の Boston を1887年の Boston と対比してえがき,弱肉強食の個人主義社会に対し,生産手段の完全な国有化の下での福祉社会,平等社会を提示したものである。その社会は,当時人々にとっては厳しい競争社会の現実を克服した博愛的な社会として烈しい共感を得たのである。事実 William Dean Howells[39] などによる,この種の Utopia 小説は1890年代に約60種ほど刊行されている。

更に H. D. Lloyd[40] も *Wealth against Common Wealth* (1894) の中で自由競争の消滅と政府による独占規制の必要を論じたのを見ても,19世紀末の現状に対する批判がいかに強かったが判る。

このような動きは,教会にも見られた。従来,もっぱら個人の魂の救済を説いてきたキリストの教えは,直接社会にも適用すべきだとする Social Gospel の説教や,更に進んで貧困地区における教育的,文化的活動を主張する Institutional Church 論まで出現するようになった。例えば Jane Adams[41] の Hull-House[42] のような施設は1894年には74,1905年には200にも達するようになり,識者の Anti-Yankeeism への批判は極めて強くなったが,政府の施策はこれに応じ得られなかったのである。要するに大統領も政党人も Yankeeism に毒せられ,時勢の進歩に気付かず,ただ金権と政権に浮き身をやつした為

に，汚職と汚名に塗られたと言うべきであろう。

ここにおいて私は，前節において Yankeeism の理念により「アメリカ人的信条」が大きく変革したという事を述べたし，事実，かつて夢想した理想的社会の実現は，大きな障害にぶちあたった事も事実であるが，この怒濤のような Yankeeism による世俗性と腐敗の拡大を喰いとめたのは何であるかという問題を考え直す必要がある。

それは端的に言えば，アメリカ国民達が，新大陸に移住してきた時に誰もが心の中にいただいていた宗教的倫理の観念である。

従って従来述べてきた「自由，平等，幸福の追及」なるアメリカ人的信条は Yankeeism の理念により大きな危機に直面したが，それは宗教的倫理観によって大きく規制されているというべきである。

この大義名分を政策に反映させるのが今後の政党の任務であり，義務でなければならない。 (未 完)

《註》

(1)「小作料を収獲物（の一部）で納める小作人」のことである。これは，黒人解放後，彼らには一応，見せかけの自立を与えたが，Planters には，戦前と変らぬ実質的利益と支配権を保証したものである。その実態と生活状態は，Erskine Caldwell の長篇小説 Tobacco Road (1932) や Gods Little Acre (1933) はじめ数多くの長・短篇小説に生き生きと描写されている。

(2) Abraham Lincoln の再建政策の理念の根拠は，「1860 年現在の南部反乱州の有権者の10%以上の者が，連邦への忠誠宣言を示すなら，その州には，奴隷制度を除いて政治制度はそのままの形で連邦への復帰を認める」というものであった。察するに A. Lincoln は，Homestead 法と移民とを組み合わせることにより，新経済政策は可能になり，そこから解放奴隷の経済的救済は可能であると考えていたのであろう。

(3) A. Lincoln の暗殺によって思いもかけない大統領に登格した当時の Johnson 副大統領が，A. Lincoln 大統領の再建政策をより保守化した形で継承しようとしたのに対抗して，急進派は北部の南部懲罰的世論を背景にした「再建両院合同委員会」の下に急進的再建政策を次々と立法化した。例えば，手初めに1866年には，解放奴隷の人権と財産権を保障する市民権法と，解放奴隷の南部における保護機関である解放奴隷管理局の存続期限延長法案を成立させたのは，まだいい方であって，

次に提案した憲法修正第14条の草稿は南部諸州に対する懲罰的意図が明らかに秘められているものであった。すなわち，この草稿は第1項「市民権法の憲法上の裏づけ」，第2項「黒人参政権問題」，第3項「旧南部連合指導者に対するパージ条項」，第4項「奴隷財産への賠償請求権の否定」という4項からなり立っていて，何れも南部にとっては厳しいものであったが，特に第2項は将来に問題を残すほど重要なものであった。それはいわば黒人参政権問題への慎重な妥協策であった。なぜならば，従来は，南部諸州の連邦下院議席の割当基準は，市民の人口に奴隷人口の3/5を加算した，いわゆる3/5条項を採用してきたものであるから，新しく全成人黒人に市民権を与えるとなると，南部の下院議席は自動的に増加することとなる。このことは北部としても望ましいことではない。そこで，黒人に投票権を与えない場合，その州から選出し得る下院議員数を，投票権を与えられない黒人人口に比例して減らそうというこみいった規定がこの第2項である。

そこで，北部は，この憲法修正第14条の批准を連邦復帰への条件としたが，南部はその批准をかたく拒否したので再建の見通しは非常に暗くなった。そこで議会は，1867年に革命的ともいえる再建法を成立させることにより，南部を5つの軍管区に分割し，再度南部を軍政下においた。それは連邦軍の監視の下で，20歳以上のすべての成年男子に（皮膚の色には無関係に）参政権を与え，その国民投票で新憲法を批准したあと，はじめて連邦復帰を許すというものであった。しかし，これを強く推進した急進派の一部の者も，経済的裏づけなくしては，これは砂上の楼閣にすぎないことを承知していたので，planters の土地の没収と黒人への分配をもりこんだ没収条項をだき合わすことを執拗に主張したが，さすがにその提案は下院でただの37票の賛成を得ただけで否決されてしまった。ともかく経済的裏づけを欠いた点，問題はさきにのびるということになった。

（4） 1876年の大統領選挙は，アメリカ人的信条の一つである Democracy を可成りゆがめたものである。すなわち，共和党は「改革派」の尊敬を受けている Rutherford B. Hayes を，民主党は改革者として名声の高い Samuel L. Tielden を候補に立てた。選挙の開票が進むと，一般投票の形勢は Democratic Party に有利となった。ところが，まだその頃 Republican Party が支配していた *La.*, *Fla.*, *S. Car.* の三州で投票をめぐる争いがあり，もしこの三州で共和党が勝てば，選挙人投票は185対184の1票差で Hayes が当選する状況となった。Republican Party 本部は，三州の支部に指令を出し，結果，民主党優勢と見られていたこの三州は強引に共和党の勝利を宣言した。そこで紛争がはじまり議会にその収捨を一任した。そこで舞台裏では秘かに共和党指導者と南部の指導者からなる民主党グループとの間に折衝が行われた。その結果 Hayes の当選が発表されたのである。

この取引きの内容は「南部は Hayes の当選を認める。そのかわり，Hayes は閣

僚に南部人を入れ，南部の交通機関を整備し，更に南部より占領軍隊を撤退させる」というものであった。

この理由として，次のような三つほどの原因と事実を挙げることができる。

1. Republican Party の主導権を握った「急進派」は，名前とは逆に，保守的な産業資本家によって占められるようになっており，政府主唱の土地改革などを決して認めようとはしなかった。
2. 黒人は人種的に白人に劣るという西欧社会の伝統的な考え方が，南北戦争中，および戦後も広く信じられていた。そしてこれは北部においても同じであった。この人種観は，実は，奴隷廃止論者の間にもおよんでいて再建時代に入っても，白人優越論に反対して，黒人の権利を擁護する者は極めて少数であった。A. Lincoln でさえ，白人と黒人の平等は現実的には大変難しいものであるから，両種族の分離が最善の方法ではないかと考えていたほどであった。事実，1890年の *Miss.* 州はじめ，南部の各州は，多種多様な方法で黒人選挙権を法的に剝奪したばかりでなく，Jim-Crow 法によって黒人を社会的にも差別していたのである。このあわれな黒人に対し，合衆国最高裁判所も，ついに「プレッシー対ファーグソン事件判決」を機会に（1896年5月18日），「分離するが平等」の原則を合憲とし，人種差別を合法化する判決を出している。

（5） 一番大きな原因は，南北戦争の目的について見られた共和党政策の曖昧さと，自党中心主義であった。なぜならば，戦争前北部の地域政党に過ぎなかった共和党は，南部 planters が崩壊して全国的政党に発展したのであるが，強固に見えたその政権は決して絶対的のものではなかった。なぜかというと，敗れた南部が再び民主党に戻るならば，北部に残る民主党勢力や産業資本家，或いは銀行勢力にのみ有利な共和党政策に反感を感じている西部農民と合流して共和党をおびやかす恐れがあったからである。

そして，その共和党は，一方では南部に対して，厳重な戦後処理政策を押しつけると共に，他方では解放した南部黒人の投票を利用して共和党政権の維持を計ることに汲々としていたから，本当の意味での黒人解放を本気で考えたとは，お義理にでも言い得なかったのである。

（6） Reconstruction 時代において旅行カバン一つを財産に，北部から南部へ渡ってきて，政界などで一働きをしようとした渡り政治屋や山師の連中を言う。

（7） Reconstruction 時代に共和党員として活躍した南部白人であって，それを南部の民主党員が軽べつ的に呼んだ言葉である。

（8） 南部において特に著るしい遅れをみせていた教育の領域においては黒人・白人の双方は義務教育制度を導入し，地域開発においては，鉄道網を整備し，また黒人を第一級の市民に育成するための種々な援助をし，同時に多くの黒人を官職に登用し

た。また黒人自身としても州議会に進出し，連邦議会にさえ選出された者もいたが，多くの場合，あまり重要でない官職に任命された。

(9) A. Lincoln の当選で政権を獲得した共和党は，1862年に，東部産業資本の要請を入れて工業の振興をはかったが同時に，もう一つの共和党支持層である西部農民の要望に応えて，まず Homestead 法を1862年に制定し，同法によって，公有地をみずから耕作する者には無償で160エーカー（約64.6ヘクタール）の土地を与えることにより，農民の年来の念願を実現させた。この事実は，アメリカ人の信条の一つであった機会均等という夢を実現させるのに大きな役割を果したと言ってよかろう。同時に，西部が発展し，人口が増加し，農業が栄えることは，アメリカ工業にとっては，市場の拡大を意味し，工業と農業が相互補充的に発展し，外国市場に依存しない自立的な国民経済を発展させた事に留意しなければならない。換言するなら，アメリカの工業化は，英国などとは異なり，絶対的に脱農業化を意味しなかったのである。

この点を政治的乃至政策的な見地からみると，共和党は，この国内市場をアメリカ産業資本に確保するために保護関税政策をとり，1861年の Morril Tariff Act 以来どんどん関税率を高め，1890年の Mckinley Tariff では平均税率49.5パーセントにまで上昇させた事実を忘れてはならない。

(10) 1869年に大陸横断鉄道は完成した。

(11) 1811年に建設にかかったが，これは単に道路だけでなく，運河の開通にも大きな影響を与えている。

(12) 1864年に契約移民法が制定された。

(13) 1812年である。

(14) 1876年に Alexander Graham Bell により発明された。

(15) 1879年に Thomas Edison により発明された。

(16) 鉄鋼の製産は南北戦争直後の1865年に1万4,000トンであったが，15年後の1880年には，100倍となり更に1890年には400万トンを越え，イギリスを凌駕するようになった。

(17) 農民達は，Homestead 法で無料の土地を得，また多くの者は，鉄道会社から土地を買い，乏しい雨量と土地の乾燥に苦しみながら大平原の征服にすすめて行った。

(18) 南北戦争後産業労働者の賃金は上昇したが，なお1900年の年収は500ドルに満たず，生計をたてるにはどうしても最低600ドルを必要とした。このために，妻や娘や子供の長時間の低賃金労働で補わなければならなかった。そして一般産業労働者の労働時間はほぼ1日10時間，労働災害率は世界最高であった。そのため，南北戦争中から熟練労働者の職能別組合が成長し，1870年代には一部の炭鉱や鉄道で暴力的な労働運動が生じた。最初の全国的組織である全国労働同盟（National Labour

Union) は1868年に誕生し，これに代わって78年に成立した労働騎士団 (Knights of Labour) は，80年代に70万人のメンバーを擁した。だが永続的組織に成長したのは，職能別大組合の連合組織であるアメリカ労働総同盟 (AFL) であった。これは1881年結成，86年に ALF (=American Federaration of Labour) を名を使用した。

Knights of Labour や National Labour Union が社会改革による労働者の事業主への昇格を夢みたのに対し，AFL は現在の資本主義体制内での労働者の地位の向上と権利の確立に努力した。そのため AFL は順調に成長し，1904年には168万人のメンバーを擁した。

(19) The United States of America は，1873年，83年，93年と10年毎に不況にみまわれた。そのたびごとに多大な犠牲を強いられたことは当然であるが，アメリカの工業化は脱農業化を意味せず，特に19世紀後半では，工業と相たずさえながら農業は発展したのである。従って工業の最盛期は農業の大拡張期でもあった。大平原の開拓，それに，農業機械と科学的農法の普及によって1870年から90年までの20年間に農業生産は金額にして4倍に増加した。しかし，この間，農産物価格と，国民経済に占める農民の富と所得の比重はとみに低下し，むしろ慢性的デフレの中で，農地や農業機械の購入で生じた負債に泣く状態であった。農民は政治家と結んだ大資本・大銀行が，低農産物価格，高鉄道運賃，関税による工業製品価格の上昇の間を縫って，当然農民が入手すべき筈の土地を鉄道に与えていると感じた程であった。

この風潮は Greenback Party や Farmer's Alliance を形成し，はては Populist Party の誕生をもたらしたのであるが，人民党は，政府を人民の手に奪回し，その権限を拡大して一切の貧困と圧制を終らすと宣言し，そのための政治改革と急進的な経済改革を求め，労働者のためにも労働時間の短縮やスト破りの禁止を唱え，その第一手段として自由銀制 (Free-Silver) なる経済政策を主張した。それは，独占資本と大銀行が政府を牛耳り事実上の金本位制によって通貨量を減じ，働く人民の貧困を生んでいる現状において，銀貨の無制限発行によりインフレ政策をとる以外に人民の解放はないと主張したのであった。

(20) 19世紀後半の急激な工業化は，工場の労働者を急増させた。そして西部への人口の移動にともない，低廉な労働力としてヨーロッパからの移民が大量に移住してきた。すなわち，1865年には，年間25万人の移民を迎えたのが，もちろん年によって多少の相違があるが，年々増加の一途をたどり，80年代には年間約50万，多い時には年間80万人近くも移住してくるようになった。ちなみに，人口総数は，1860年に3,400万余であったものが，1890年には，6,300万となり，30年間に倍近くになった訳である。

このように移民が増大するにともない，外国生まれの者の数と%が急増するにつ

れて，旧定住者との間に，いろいろなまさつと悶着が起き，ついには移民制限の問題に発展して行ったのである。

(21) アメリカ文化論〔1〕§ 7, p. 49—p. 51 参照。

(22) *ibid.* § 8, p. 51—p. 59 参照。

(23) *ibid.* p. 64 参照。

(24) *ibid.* p. 64—p. 65 参照。

(25) Abraham Lincoln の次の第17代大統領 Andrew Johnson, 18代 Ulysses, S. Grant 以下第21代 Charles A. Arthur までの共和党政権は言うに及ばず，第22代 Grover Cleavland すら，関税政策一辺倒から抜け出れなかった。

すなわち Grover Cleaveland は南北戦争以後はじめての民主党出身の大統領であった。彼は，一応利権法案拒否，高関税法案反対の挙に出たが，農民，移民，労働の諸問題には対処できなかった。ついで，Benjanin Harrison（共和党）と交替し，1892年に再度第24代大統領として返えり咲いたが，時代の要求は彼のレッセ，フエール的政治理念を圧倒したのであった。次に第25代 William Mckinley（1887—1900）（共和党）があとを承けたが，いわゆる Mckinley 関税が反感を呼び，ここに人民党が有力になってきた。そして，1892年に100万票を集めた人民党は Free Silver を要求することにより西部と南部の民主党をだきこみはじめた。同じ92年に Pennsylvania のカーネギー製鋼所で発生した暴動はストに発展し，州兵8,000人が出動した。そして93年に Cleaveland の就任と共に大不況が襲来し，労働者の20%が失業した。そして94年には鉄道ストとなり Chicago 以西の鉄道は全面麻痺に陥ったという事実が絡んでいる。

(26) Margaret Mitchel (1905–1949)：彼女の Best-Seller である *Gone with the Wind* は，無名の若い婦人を一躍羨望の的とならしめた。この小説が幾百万の読者をかち得たのは，迫力のある女性をめぐるさまざまな大衆向きの人物が従横に活躍しているさまが巧みに描写されていることも原因であるが，南北戦争に新しい側面観を与えていることも大きな原因となっている。

(27) Mark Twain (1835–1910)：Missouri 州の片田舎に生れ，一獲千金を夢み，印刷植字工，水先案内人，坑夫，試掘投機業などの経験を経て，Artesmus Ward（本名 Charles Farrar Brown, 1834–67）から話術を学び，ついで Bret Harte から小説作法を習い *The Celebrated Jumping Frog of Calaveras County* (1865) で作家としての脚光を浴び *The Innocent Abroad* (1869), *The Gilded Age* (1873), *The Adventure of Tom Sawyer* (1876), *The Adventure of Huckleberry Finn* (1885) などにより "The Lincoln of American Literature" (William Dean Howells ; *My Mark Twain*) と呼ばれる大文豪となった。

事実，数多くの短篇小説と相俟って彼に対する評価は今日でも不動であるが，特

に，当時の風潮をいかんなく描写した *The Gilded Age* (Charles Dudley Warner (1829—1900) との合作) は当時の社会情勢を的確に描いている。英国の自由主義者 Godwin は，1870年時代のアメリカを Chromo Civilization (着色石版的文明) と嘲ったが，それがすなわち Gilded Age である。

小説 *The Gilded Age* の主人公 Philip Sterling が石炭鉱発掘狂となったが遂いには多大な財をなすに至った。それで恋人 Ruth Bolton と結婚して幸福な生活に入ったという話であるが，本小説の狙いは，むしろ脇役として登場する Kansas 州選出の Senator Dillworthy, 女 lobbyist の Laura Hawkins などの活躍を通してみられる金権万能主義への批判である。

(28) 金勝　久(篇)，Bertrand Russell, *The Chinese Characters* (p. 13; p. 42; p. 6) (1978旺史社)

(29) 金勝　久(訳)，対訳ラッセル論説集 (p. 151; p. 201; p. 139) (1969興文社)

(30) このことは，底辺にいる民衆が頂点へのぼれる可能性を信じ得ることによって烈しい競争と緊張をはらむ社会であるにせよ，アメリカ社会は本質的に，同一性と一体感を持ち得るのであった。別の言葉で言うならば，White House の主はただ一人であるにせよ，それは one of us (われらの一人) であるという感じ方によって，民衆と頂点は結ばれていたのであった。

(31) Thorstein Bunde Veblen (1857—1929): アメリカの社会学者・経済学者であり Chicago 大学教授 (1892—1906) として有名であるが，その著 *The theory of leisure class* (1899) と *The theory of business enterprise* (1904) は特に学会の注目を惹いた。

(32) この点をもっと具体的に言うと，イギリス風の洋服を着，フランス風のシャトーをまねた邸宅をニューヨーク5番街に造り，それをイタリア画家の絵で飾り，ヨットで地中海に遊ぶといった生活を誇示することによって，百万長者は民衆からみずから切り離している事実を言うのである。

(33) Lester Frank Ward (1841—1913): アメリカの社会学者であって，南北戦争に参加後，官庁に奉職する傍ら，大学で植物学，古生物学を学び遂にはその専門家となる。1906年以来 Brown 大学の社会学教授となってからは7年間，アメリカ社会学会々長の要職につく。

彼の社会学は，生物学の基盤にたち，社会の変化とその理知的活動を重視している。その点 Spencer が力学的知識を基盤として社会学を論じているのと対照的主張を見せている。著書には *Dynamic Sociology* (1883), *Pure Sociology* (1903), *Applied Sociology* (1906) などがある。

(34) L. F. Ward; *Dynamic Sociology* (1883) 参照。

(35) Ely, Richard Theodore (1854—1943): アメリカの経済学者。New York に

生れ，Columbia 大学卒業後，Heidelberg で学位取得 (1879)。いわゆる The naturalistic viewpoints of classical writers on economics (=The Social Darwinists)" に挑戦し，特に Organization of labour と The public ownership of natural resources and public utilities を主張した。この間の彼の著書として，*French and German Socialism in Modern Times* (1883) 」 *Introduction to Political Economy* (1889) が特に有名である。その後，彼は University of Wisconsn に移り，33年間教授をしている間に *Monopolies and Trusts* (1900), *Studies in the Evolution of Industrial Society* (1903), *Foundation of National Prosperity* (1917) 著書を書き，最後に North Western University の経済研究所々長として経済界に貢献する傍ら *Elements of Land Economics* (1926); *Hard Times* (1931); *Outlines of Economics* (1937) などの単著や共著を書いている。

(36) Oliver Wendell Holms (1841—1935): アメリカの法学者。Boston 生れ。Havard 大学卒業後，南北戦争に参加。その後，Havard 大学を経て，*Mass.* 州の最高裁判所判事，連邦最高裁所判事となる。

彼は，法律の伝統を，新しい社会情勢に調和，適用させるための独自の見解を唱導した。著書は *The Common Law* や *Collected Legal Papers* がある。

(37) Henry George (1839—97): アメリカの社会思想家。初等教育を終えて給仕・船員などをやって各地を放浪した後，California に住み (1857)，印刷工・新聞通信員・出版業などをした。この間，同地の鉄道建設業が土地の暴騰に伴って少数の富裕者と多数の貧困者を生むのを見て，この原因は，土地私有による地主階級の不労所得にありとして，その対策には高率の単税を課す以外に方策はないと確信した。そこで *Our Land and Land Policy* (1871) を出し，更に，その主張を *Progress and Poverty* (1879) に一層詳細に表明して内外の反響を呼んだ。

彼は1886年，1897年の二回にわたって，New York 市長選に立候補したが，二度目の選挙中に病死した。著書としては，前記のものの外に *The Irish land question* (1881), *Social problems* (1884), *Protection and Free Trade* (1886), *Science of political economy* (887), *etc.* がある。

(38) Edward Bellamy (1850—98): アメリカの思想家。国家社会主義的立場から労働問題の解決を国民組織に求めた国民主義運動の先駆者。*Looking Backward* (1888) なるユートピア小説で有名である。

(39) William Dean Howells (1837—1920): アメリカの小説家。*Atlantic Monthly* や *Harpers Magazine* を編集し，小説のほかドラマ・評論・詩などを沢山書いた。後年トルストイに心酔している。

(40) Henry Demarest Lloyd (1847—1903): Jounalist ならびに弁護士として活躍。

ロックフェラー財閥の内幕を暴露したし，ついで，スプリング・ヴァリ炭鉱のストライキに際し組合員に加えられたテロ行為を指摘した。

(41) Jane Adams (1866—1935)：キリスト教事業家。イリノイ州に生れ，キリスト教伝道と社会事業に献身し，種々な救済事業に成功している。特に Hull-House は有名。1915年「平和自由婦人同盟」の会長。1931年にノーベル賞受賞。

(42) Jane Adams の開設したセットルメントで，アメリカのセットルメントの模範とされ，ここから数多くの有能な婦人社会事業家が出ている。

開設のいきさつは次の通りである。Jane Adams が London のスラム街にあるトインビー・ホールを訪れ深い感銘を受け，自らも社会事業家を志し，1889年 Chicago の Hull 氏所有の家屋を借り，Hull-House と名づけて，貧しい人々のための社会教育と保育を行った。Adams 29才の時である。その後，事業は拡大され，労働者のためのリクリエーションセンター，成人教育施設，更に演劇・音楽・美術のクラスも設けられるようになった。